

26 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、11ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問の **A・I・U・E** のうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 郷土芸能を鑑賞する。
- (2) 講師の博学ぶりに驚嘆する。
- (3) 旅行先で、その土地の銘菓を買う。
- (4) 体操選手の鮮やかな演技に魅了される。
- (5) 木枯らしが吹いて、日ごとに寒さが募る。

2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 梅の花を見て、シヨシユンを感じる。
- (2) 湖面に、冠雪した山がサカさに映る。
- (3) 友人の話は機知にトんでいておもしろい。
- (4) ホテルのキャクシツで旅の疲れをいやす。
- (5) 駅に向かうバスが幹線道路に架かるリツキョウを渡る。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

理科教師として、海辺の町にある中学校へ期限付きで赴任した紺野先生は、秋の日の午後、海岸の堤防を散歩していた。

堤防の少年たちは、次の日曜日にひかえた運動会の練習をしていた。クラス対抗で行われる競技に、よい成績をおさめようというのである。山がすぐそこまで迫った海辺の町のこと。斜面をのぼる細い坂道が多く、練習をする場所はかぎられていた。学校の庭は練習日が割り当てになつていたので、その日以外に練習をしたときには町のどこかに場所を探さねばならなかった。とくに熱心なクラスの少年たちは海風に吹かれながら、堤防を走っていた。風は強いが、町で唯一の直線の走行路である。

(1) 秋の日暮れはせわしない。西の海はやくも白金のように煌めいている。夕靄にかすんだ太陽は、あたりの雲を紅に染めながら、先を急いで傾いてゆく。黄金色が西の海全体に広まった。だが、やがて海面にほどこされた金箔は、少しずつ剥がれて波間に消え、紫雲のたなびく海へのみこまれてしまう。

少年たちは白い体操服の背に西陽を受け、バトンの受け渡してしびの練習をくりかえしていた。彼らは夏の名残の日焼けした腕をふる。浜辺では走り幅跳びの踏み切りを、さかんに練習している生徒もいる。薄暮が満ちてくるにつれ、シュウズの白さがきわだった。少年たちは無駄口をきかない。号令をかけ、合図をおくり、記録を確認してはときおり歓声をあげた。

紺野先生は堤防の端に自転車をとめ、少年たちの練習をながめている。はじめのうちは先生のことを意識していた少年たちも、しだいに練習に没

頭する。紺野先生は、海辺の町の夕暮れはどんなだろうと思いついて、ふらりと散歩に出たのだった。南に山、北に海の広がる土地。この季節、紺野先生はちょっとした目当てがあつてこの町への赴任を悦んだ。日没とともに、北斗七星が水平線すれすれに姿を見せる。海岸が南側にある町で生まれた紺野先生には、わざわざ時間をさく価値のある光景だ。この土地で、毎日北の海をながめている少年たちは、どうだろうか。紺野先生はそんなことを思いながら、影の行き交う堤防に目を凝らした。

ぽつんと、少し離れたところに制服姿の少年がいて、皆の練習を見るでもなく、沈んだ顔をして腰かけていた。紺野先生は気になってその少年の傍へ行った。

「きみは練習をしないのかい、」

少年は小さく溜め息をついたあとで、脇においてあつた松葉杖を見せた。彼は、左の足首に繃帯をしている。

「なるほど、怪我をしていたのか。」

「土曜日に、自転車ごと坂道を転げ落ちて挫いたんだ。舗装が剥がれていて、車輪が横滑りしたんです。骨折はしてないけど、歩くのがやっただから、運動会は棄権です。」

少年はほんとうならレレーの選手だった。足の速い子は敏捷さが顔にでるもので、この少年もそんなようすをしていた。ときおり口惜しそうに、級友たちの練習風景にまなざしを向け、溜め息をつく。いつのまにか陽が沈み、潮のかおりがきつくなっていた。

「先生は散歩ですか。ここらへんはずっと堤防がつづいているだけですよ。」

少年が云う。

(2) 「でも、見晴らしがいいね。水平線をながめるにはもってこいだ。」

紺野先生は浮き浮きしたようすで、群青に深まってゆく夜天を見わたした。少年はいつも見慣れたこの海がそんなにもいいものかと、つられてながめ、首をひねる。秋の夜天は一等星が少ない。地味な星ばかりだ。

堤防に照明が点つた。あたりに少年たちの帰宅をうながす気配が漂い、ちらばって練習していた少年たちは帰り仕度をはじめた。ようやく談笑する声もれて、彼らの表情が和んだ。やがて、それぞれの家のある方向へ散つてゆく。何人かの生徒が、紺野先生と松葉杖の少年のまえを通り過ぎ、声をかけてゆく。少年はうなずくものの、うつむいた顔をあげずに黙っていた。

「ここは意外に明るいな。もつと暗いところはないかな。」

堤防は水銀灯に照らされ、煌々と明るい。紺野先生はあたりを見まわした。

「うちの庭からも水平線が見えますよ。灯もありません。よろしかったら、いらしてください。」

少年の家は張り出した斜面にあるらしい。紺野先生は訪ねてみることにした。少年を自転車に乗せ、通りを押して行く。彼の家では、痩せがたの母親が迎え、「まあ、先生が送ってくたさるなんて。」と恐縮する。少年の家は紺野先生が想像していたよりもずっと大きかった。よく手入れされた庭の端に露台のような石囲いがあり、なるほどそこから海がよく見える。「北斗七星には連星があるんだよ。きみは目がいいかい。肉眼でもふたつあるのがわかるから見てごらん。柄のところだ。厳密に云うと、そのふた

つの星のあいだにはまだひとつの星がある。しかも、さっきの星のひとつはさらにべつの星との連星なんだ。」

「ややこしいですね。」

紺野先生は自分ばかりが愉^{たの}しんでいるようで、気がひける。浮かない顔の少年にもうひとつ耳寄りな話を披露した。

「見てごらん。北斗七星のひしゃくのところを。海の水を汲^くんでいるように見えるだろう。」

(4) 少年はそう云われて、水平線に目を凝らした。ひしゃくの一部が水平線に没して、わずかに海水を汲んでいる。秋の深まるこの季節だけの光景だと、紺野先生はつけくわえた。

「へえ、あのひしゃくは水を汲めるのか。だ、ぢやなかったんだ。」

少年は感心したように海をながめ、沈んでいた表情に笑みを浮かべた。

「先生は来週まででしょう。ぼくの足の速いところを見せられなくて残念だな。」

紺野先生を玄関まで見送りに出た少年は、よく履きこなしたシューズを示しながらそう云う。紺野先生は元気よく手をふって少年と別れた。

(長野まゆみ「夏帽子」による)

〔問1〕⁽¹⁾ 夕靄^{ゆがも}にかすんだ太陽は、あたりの雲を紅に染めながら、先を急

いで傾いてゆく。黄金色^{きんいろ}が西の海全体に広まった。だが、やがて海面にほどこされた金箔^{きんぱく}は、少しずつ剥^はがれて波間に消え、紫雲のたなびく海へのみこまれてしまう。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 刻々と変化する夕靄の様子と様々に形を変える雲の様子とを、多角的に分析してとらえ、光と影を描き分けて対照的に表現している。

イ 水平線にゆっくりと沈んでいく夕日の様子を、細部までありのままにとらえ、順序立てて描くことで論理的に表現している。

ウ 時間の経過とともに変わっていく夕暮れの情景を、色彩感覚豊かにとらえ、たとえを用いながら印象的に表現している。

エ 夕焼けに照らされて一瞬のうちに変化した西の海の情景を、波の動きに注目してすばやくとらえ、生き生きと躍動的に表現している。

〔問2〕⁽²⁾ 「でも、見晴らしがいいね。水平線をながめるにはもってこいだ。」とあるが、このときの紺野先生の気持ちとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 見晴らしのよい水平線の上の空が群青に深まっていくことに気付かない少年に、何とかそのよさを感じてほしいと思う気持ち。

イ 自分は価値があると思っている北の海をつまらないと言う少年に、北斗七星のすばらしさを伝えたくて強く反論したい気持ち。

ウ 少年の言葉をよそに、ようやく見られる北の海の夜空に期待を寄せ一人で水平線をながめることに集中しようと思う気持ち。

エ 沈んだ様子の少年が気になりながらも、北斗七星が水平線に見えぬ光景をながめられる期待とうれしきで心が躍るような気持ち。

〔問3〕⁽³⁾ 少年はうなずくものの、うつむいた顔をあげずに黙っていた。

とあるが、この表現から読み取れる「少年」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 練習はできないもののせめて見学はしようと思っていたが、日没で他の生徒が帰ってしまい残念に思っ
て落ち込んでいる様子。

イ 練習を終えてくつろぎながら帰る級友と比べて走れない自分にやり切れなさを感じ、声をかけられても答えられずにいる様子。

ウ 練習する級友たちを一人だけで見ていたのに、紺野先生に話しかけられて恥ずかしくなってしまうことを隠そうとしている様子。

エ 練習に参加できないことで孤立してしまうと不安に感じていたが、級友に声をかけられて余計な心配だったとほっとしている様子。

〔問4〕⁽⁴⁾ 少年はそう云われて、水平線に目を凝らした。とあるが、「少年」が「水平線に目を凝らした」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 北斗七星について考えもしなかったことを紺野先生から言われ、その光景を自分から確かめずにはいられない気持ちになったから。

イ 自分を励ましてくれる紺野先生の気持ちを察して、せめて態度だけでも興味を抱いていることを示そうという気持ちになったから。

ウ 紺野先生の北斗七星についての説明が信じられず、疑問を抱きながらも実際に見てから質問してみようという気持ちになったから。

エ 以前から関心をもっていたことを紺野先生から言われ、一緒に北斗七星が海の水を汲む様子を楽しみたい気持ちになったから。

〔問5〕 この文章を読んで、あなたが「少年」だとして、紺野先生と別

れた場面の後に、紺野先生とやりとりをしたときの気持ちを母親に伝えるとしたら、どのように言うか。あなたの話す言葉を五十字以内でまとめて書け。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

複雑適応系としてのエコシステムがどのように成り立っているのかの研究は、生態学の大きなテーマである。複雑適応系は、文字通り複雑であり、単純な法則を当てはめることによって、その動向が予測可能とはならない。しかし、生物群集やエコシステムの理解は、私たち人間がどのように環境を利用すればよいのかという、現代文明の直面する大問題の解決に不可欠である。（第一段）

人間という種、ホモ・サピエンスがこの地上に出現してから、まだ二十万年しか経っていない。人間は、狩猟採集を生業として暮らし、他の動物と同じように生態系の一員として、複雑適応系の中に組み込まれて生きてきた。しかし、およそ一万年前に農耕と牧畜が発明され、定住生活が始まった。人間は、大規模に自然を改変するようになった。以後の一万年に、都市が生じ、工業化が起こり、化石燃料を燃やすことによる新たなエネルギー源が使われるようになった。この変化、文明の発展により、環境問題が認識されるようになった。（第二段）

環境問題は、まずは公害問題として認識された。それは、日本における水俣病（みまたびょう）に代表されるように、長らく原因が分からず多くの人が苦しむ結果となった。それでも、最終的には、汚染の原因が水銀であり、なぜそのような悪影響が出るのか、研究の結果はつきりと理解されたため、法律で原因物質の流出を規制するという解決に至った。その他の環境毒性物質の規制についても同様である。これは、毒性物質と健康被害との関係が明確で単純であるため、一度理解されると対応策が明らかになり、それに

賛同する民意も容易に形成された例であった。（第三段）

次に、乱獲による動物や植物の絶滅という問題が認識されるようになった。それも、その種の捕獲や採集、取引などを法律で制限することで解決に向かった。人間の生存にさして必須（ひつす）でもない物品の商取引によって生物が絶滅の危機（ひび）に瀕（ひ）していることが知られると、それをやめて生物の絶滅を防ごうという民意は簡単に形成される。象牙（ぞうげ）、鼈甲（べいこう）などの製品の取引が禁止されたことなどはその例であろう。ほかにも絶滅の危機に瀕している生物種はたくさんあるが、なぜある程の生物が選ばれて人々の注目を集めるのかには、一般の人々がその生物に対して抱いているイメージや好感度など、科学的ではない問題も大きな影響を与えている。（第四段）

しかし、二酸化炭素の排出による地球の温暖化と気候変動や、生物多様性の減少の問題は、公害や特定の種の絶滅の問題よりもずっと多岐にわたる要素を含んでいる。⁽¹⁾それは、複雑適応系の動向に関する問題であり、単純な因果関係の理解にはならないのである。（第五段）

本来は自然界で使われることのなかった化石燃料のエネルギーを使うことは、エコシステムという複雑適応系にどのような影響を与えるのか。多様な種が相互作用して成り立っているエコシステムの中で、生物多様性を減少させていくと、システムはどうなるのか。このような大きな問題の認識が、「持続可能性」という概念を生じさせた。それは、単なる環境中の毒物の規制や特定絶滅危惧種（きんしゅ）の捕獲禁止などではなく、より広く、この複雑適応系を崩壊させずに、なるべく現在の豊かさを保つたまま次の世代の人間たちに受け渡していくにはどうすればよいのかという、より広い視点での環境問題のとらえ方であろう。（第六段）

エコシステムにおけるエネルギーと物質の流れが何億年という時間の中で作られてきたことを考えれば、人間は、生物進化の歴史の中ではほんの一瞬とも言える年月の間に、大量のエネルギーを使い、いろいろな物質の循環を乱している。地球の複雑適応系はどうなるのだろうか。生物間の相互作用が非常に複雑にからみあった結果としてエコシステムがあるならば、その内部に存在する多くの種を絶滅させ、食物網を単純化させていくと、システムはどこに向かうのだろうか。²⁾ これを続けていってシステムが激変を起こすようであれば、持続可能とは言えない。(第七段)

地球の生態系は、人間の生存に適するように作られているわけではない。たまたま、現在の人間が、現在の生態系に適応して生きてきただけだ。地球生態系は、何があるかと、いろいろな変化を経て持続していくだろう。その意味で、地球生態系の持続可能性が問題なのではない。問題は、人間という生物が心地よく生きていけるような環境の持続可能性だ。そのような環境状態は、永遠に続くものではない。人間自身が環境を変化させることにより、その状態は変わってしまうかもしれない。人間の生存に適した環境をのちの世代まで残して残していくことが、持続可能性の考えの根幹である。(第八段)

そのために、現在の生物多様性を保っていくことが重要であることは、おぼろげながら認識されている。しかし、生物多様性を保つことの重要性についての厳密な科学的理解は、まだ十分ではない。生態系の中には多くの種が存在するが、それらは生産者、第一次消費者、第二次消費者などの異なる機能を果たしている。しかも、そのような関係は、「食物連鎖」という言葉から想起されるような、下から上への単純な直線的関係ではなく、まさに

さまざまな生物種が網の目のような複雑な関係に取り囲まれている関係なので、現在では、「食物網」という言葉の方がよく使われる。(第九段) なぜ網の目のようになるかと言えば、多くの生態系は、種の組み合わせが異なるいくつもの食物連鎖のつながりを包含しているからだ。その意味で、いろいろな種の機能が重複している。つまり、冗長性が高いのである。また、同じ地域の中でも異なる種の組み合わせによる集合が、それぞれ関係の濃さに濃淡をもって存在している。つまり不均一な構造をもっているのである。機能の冗長性と構造の不均一性が、生態系全体に、かく乱に対する強さ、^{*} レジリアンスを与えていることは分かっていた。(第十段)

同じような機能を果たしている種が何種もあるのならば、それらの一つが絶滅してもたいした影響はないと考えられるかもしれない。しかし、冗長性は、かく乱に対する抵抗力の強さとして働いている。^{*} ポール・エリックがたとえ話として表現したように、飛行機の胴体をつないでいるリベットはたくさんあり、一つや二つを抜いても飛行機は保たれるだろう。しかし、何十個と抜いていくと、あるとき飛行機は瓦解する。³⁾ それと同じに、生態系の中で同じような機能を果たしている種がいくつも存在しても、それは不必要ということではないのだ。(第十一段)

(長谷川眞理子「生態学から見た持続可能な社会」による)

〔注〕 エコシステム——生態系。

亀甲^{べつこう}——タイマイというカメの甲羅。

レジリアンス——回復力。

ポール・エールリック——アメリカの生物学者。

瓦解^{がかい}——ばらばらになってしまうこと。

〔問1〕⁽¹⁾ それは、複雑適応系の動向に関する問題であり、単純な因果関係の理解にはならないのである。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 乱獲による動物や植物の絶滅の問題は、人々の抱くイメージが関係するなど、科学的ではない理由が大きな影響を与えるということ。

イ 生物多様性の減少など多くの要素を含む問題は、原因の排除で解決するのではなく、より広い視点でとらえるべき問題であるということ。

ウ 次世代が豊かな生活を継続できないという問題は、原因が複雑にからみ合っているので、人間には理解困難な問題であるということ。

エ 公害や特定の種の絶滅の問題は、様々なシステムがからむ複雑な問題であり、簡単に解決できるようなものではないということ。

〔問2〕⁽²⁾ これを続けていってシステムが激変を起こすようであれば、持続可能とは言えない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 人間が大量のエネルギーを使うことによって物質の循環を乱すと、地球生態系は持続できなくなってしまうと考えたから。

イ 種の絶滅によって地球環境が変化しなかったとしても、人間は現在の生態系にいつまでも適応できるとは限らないと考えたから。

ウ エコシステムの中にある生物種が減少して食物網が単純化すると、地球環境がどのように変化するか予測できなくなると考えたから。

エ 人間は現在の生態系に適応して生きているが、環境を大きく変化させると人間の生存には適さない環境になってしまうと考えたから。

〔問3〕 この文章の構成における第九段の役割を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 前段で述べた主張について、その解決の基本的な道筋を示すとともに、新たな視点を提供することで文章全体の結論を導いている。

イ 前段で述べた主張について、新たな具体例を挙げるとともに、さらに詳しい説明を加えることで論を分かりやすくしている。

ウ 前段で述べた主張について、その根拠となる事例を挙げるとともに、一般的な見解を示すことで論の妥当性を主張している。

エ 前段で述べた主張について、批判的な立場から意見を示すとともに、新たな具体例を挙げることで話題の転換を図っている。

〔問4〕⁽³⁾ それと同じに、生態系の中で同じような機能を果たしている種がいくつも存在しても、それは不必要ということではないのだ。とあるが、「生態系の中で同じような機能を果たしている種がいくつも存在しても、それは不必要ということではない」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 生態系の中で異なる種の間が不均一な構造をもてば、いくつかの種が絶滅しても生態系全体への影響はほとんどないと考えたから。

イ 生態系を構成する多くの種の機能は重複しているが、環境の持続のためにそれぞれの種に異なる役割が与えられていると考えたから。

ウ 機能が重複している多くの種の存在は、環境が多少乱されても生態系の激変を防ぐ抵抗力の強さとして不可欠であると考えたから。

エ 機能が重複している種の数が増えただけでも、一つ二つが絶滅してしまうだけで生態系が直ちに激変してしまうと考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「環境の持続可能性」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「などもそれぞれ字数に数えよ。

5

次のAは「百人一首」に関する対談の記録であり、Bは「百人一首」の成立について書かれた文章である。また、Aのあとにある 内の文章は、Aに引用されている和歌の現代語訳である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

馬場 いま若い人たちが百人一首に注目している理由は、競技かるたの興隆という点は大きいと思いますが、もう一つの理由として、私はいまは古い言葉が新しく見える時代だということがあるのではないかと感じています。私は、現代の表現方法がある種の行き詰まりにきていると思っています。百人一首は現代の人が一度読んだだけではわかりにくいけれども、どこか魅力がある。言葉の魅力がある。未来志向ばかりのなかで行き詰まった現代の表現方法が、ふと後ろを振り返ってみると、百人一首の魅力な言葉というものを再発見したのではないか。そして、現代はそういう歌のなかの言葉の魅力というのが強く感じられる時代なのだと思います。

水原 百人一首を選んだのは定家ていかだと言われていますけれども、歌の意味よりもしらべで選んでいるのではないかと思っています。たとえば、藤原実方まじむらのさねかた「かくとだに」の歌のような超絶技巧がつかわれた歌が選ばれている。この歌のように、近代が否定した和歌的技巧というものの中に実は歌の心があるのではないかと私は思っています。

馬場 いまお話に出た藤原実方の歌は、女のもとに贈った歌でしたよね。私は、この歌が現場の歌だということに非常に大きな意味を感じます。この

「かくとだにえやは伊吹いぶきのさしも草さしも知らじな燃ゆる思ひを」

という歌を男からもらったときに、一度見ただけで読み取れる能力が女にあつて、さらにその言葉に対する受け止め方があつたということですよ。ね。

非常に面白いのですが、百人一首はほとんど三句切れなんですよ。ね。

永田和宏ながたかずひろが「鏡合わせ」と言っていますが、上の句と下の句それぞれで二つのことを言っている。これが王朝短歌の一つの約束事だつたと思います。しかし、本音は結局は下の句で言う。実方の歌も「さしも知らじな燃ゆる思ひを」だけでいい。そこだけでいいのに、「かくとだにえやは伊吹のさしも草」という大変に難しそうな言葉がくつついていて。これが当時の歌人のプライドなんですよ。言葉を操るといふことが。(2)

水原みづはら それが気持ちいいんですよ。その歌を声に出して音声として、自分がなかで反芻はんすうすると、ふうつと心地よい気持ちになつてしまふと思ふんです。

百人一首の歌を読むと、なにかこうその作者の気持ちになれるというか、その作者と「つながる」ような感じがします。私は、いままた百人一首が読まれているというのは、この感覚に多くの人が何か感じるものがあるからなのではないかと思ふんです。

馬場 「つながる」というのは面白いですね。さきほど私がいった、言葉の魅力にも通じますが、百人一首にはそういう魅力があると思います。ね。歌を読んで、心地よい気持ちになるといふような。

百人一首に関して、私がおも一つ考えているのは、この歌集が定家の最晩年の仕事だということです。七十代の半ばのものだと言われている。すね。晩年の定家は、自身の作品自体は衰えて、とてもつまらない歌し

か詠んでいない。しかし、意欲や短歌に対する想いというのは強くなつていく感じがします。『新古今』を撰んだときのような狭量きやうりやうの幅ではなくて、百人一首に関してはすごく幅が広い。数えてみたら、百人一首はまず『古今集』から二十四首とついています。次に『後拾遺集』から十四首。『拾遺集』から十一首。この三つの勅撰集ちやくせんしゅうから四十九首です。それから、およそ半分もとつてしまつてしまつていくわけです。さらに『後拾遺集』から十四首もとつていっているのはなんだろうかと思ふと、その時期の歌に人間の言葉技と本音の合わせり方が一番凝集していたということだろうと思ひます。

水原 それは『新古今』よりもということですか。

馬場 『新古今』は言葉技だけになつてしまつて本音がないのではないか。先の勅撰集の時代には定家の考えでは言葉技だけではないものがあつたということではないでしょうか。定家は七十代の半ばになつてみて、歌とはやはり心がなくてはいけない、心がある言葉をもう一度考え直していたのではないかと思ひます。水原さんが先ほどおっしゃつた超絶技巧ちやうせつぎというものにも、技だけではない心があつたから成立しているわけですよ。

水原 技があつてこそ心が乗るといふ面があると思ひますね。

馬場 その通りだと思います。ただ反対に、心があつて技があるという場合もあるでしょう。いずれにしても技だけというわけではない。

(馬場あき子、水原紫苑「伝統を継ぐ、歌とつながる」による)

このように恋しているだけでも、どうしても口に出して言えるでしょう。言えないからあなたはそうとも知らないでしょうね。ちようどもぐさのように燃える私の思いを。

(久保田淳、平田喜信「後拾遺和歌集」による)

B

『小倉百首』の撰者が定家であることについては、たぶん動かないとしても、その成立事情は、かなり複雑な経緯をたどったものと想定されています。しかも、この点については、今なお議論の絶えない状況です。しかし、定家の手によって鎌倉時代前期の文暦二年(一二三五)五月二十七日に撰ばれ、成立した可能性が高いと、一応は集約できるとありましょう。時に定家は、すでに七十四歳に達していました。しかも、その同じ文暦二年の三月に、定家は単独で『新勅撰集』の撰進を成し遂げています。⁽⁴⁾したがって『小倉百首』は、定家晩年の好みと撰歌意識とを如実に反映した珠玉集ということになります。

右の推定の拠りどころとなっているのは、定家の日記として知られる『明月記』(漢文体)の文暦二年五月二十七日の記事です。それをいま読み下し文にしてみると、次のようになるでしょう。

予、本より文字を書くことを知らず、嵯峨中院の障子の色紙形、故らに予書くべき由、彼の入道懇切なり。極めて見苦しき事と雖も、慙いに筆を染め、之を送る。古来の人の歌各一首、天智天皇より以来、家隆・雅経卿に及ぶ。

この一文には、定家の謙遜の言葉もふくまれています。なお、右の文中にある「予」とは定家自身のことを指しています。右の一文は次のように読めるでしょう。

私はもとより文字を書くことを知らない。蓮生の嵯峨の別荘の襖に貼る「色紙形」(歌を書いた色紙のことで、後に「小倉色紙」とも呼ばれているもの)を、わざわざ私に書くようにと、あの蓮生入道がねんごろに依頼してきた。そこで私は、極めて見苦しいことだとは思ったが、しいて染筆して、これを書き送った。それは天智天皇の歌から藤原家隆・藤原雅経卿の歌に及ぶものであった。

(神作光「百人一首の文化史」による)

〔注〕藤原実方——平安時代の歌人。

永田和宏——現代の歌人。

『後拾遺集』、『拾遺集』——ともに平安時代の歌集。

勅撰集——天皇や上皇などの命令によって編集された歌集。

もぐさ——ヨモギの葉を干して作った綿のようなもの。灸に用いる。

撰進——詩歌などを作ったり集めたりして天皇に献上すること。

〔問1〕⁽¹⁾ 私はいまは古い言葉が新しく見える時代だということがあるのではないかと感じています。とあるが、ここでいう「古い言葉が新しく見える」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 百人一首を読む現代の人々が、日常生活では使われることのないた

くさんの言葉を見て、一語一語を奇妙に感じるということ。

イ 百人一首に注目する現代の人々が、歌として読み味わうだけでなく、競技かるたという形で親しむようになってきたということ。

ウ 表現に窮した現代の人々が、百人一首の歌の言葉に心が引きつけられ、その言葉のもつ力に改めて強く気付かされるということ。

エ 常に新しい時代に目を向ける現代の人々が、百人一首の歌に用いられている難解な言葉について、意味の理解に苦勞するということ。

〔問2〕⁽²⁾ 水原の発言のこの対談における役割を説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 馬場さんが述べた歌の作者の思いを受け、新たな視点として読み手のとらえ方を感覚的な言葉で示すことで、対談の内容を深めている。

イ 百人一首が成立した当時の作者に関する馬場さんの話に対し、現代の歌の作者に関する内容に触れることで、話題の転換を図っている。

ウ 馬場さんが一般的な歌のきまりについて説明したのに対し、一つの歌に絞って自分の感想を述べることで、話題を焦点化させている。

エ 例として挙げた歌に関する馬場さんの解釈を受け、それとは異なった自分の解釈を紹介することで、問題の所在を明らかにしている。

〔問3〕⁽³⁾ そうとも知らないでしょうね。とあるが、「そうとも知らないでしょうね」に相当する部分を、Aに引用されている和歌からそのまま抜き出して書け。

〔問4〕⁽⁴⁾ したがって『小倉百首』は、定家晩年の好みと撰歌意識とを如

実に反映した珠玉集ということになります。とあるが、ここでいう「定家晩年の好みと撰歌意識」について、Aで馬場さんほどのように述べているか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 定家は、たとえ難解な言葉が歌に用いられていても、読み手には内容をすぐに理解できる能力がなければならぬと考えていた。

イ 定家は、自分では質の低い歌しか作れないとしても、歌に対する思いはどの歌人よりも強くもっていないと考えていた。

ウ 定家は、読むと気持ちがよくなり、作者との結び付きを感じることができる歌こそが高い評価を受けなければならないと考えていた。

エ 定家は、優れた歌は言葉が巧みに用いられているだけでなく、歌人の胸の内や本音が表現されていなければならないと考えていた。

〔問5〕⁽⁵⁾ もとよりとあるが、これと同じ意味・用法で「もとより」を用いて、二十五字以上三十五字以内で文を作れ。なお、や。などもそれぞれ字数に数えよ。